

ねこみみテレパス

～ふたりだけのひみつの^{こい}恋～

しば の り な こ
柴野理奈子・作

かつら
桂イチホ・絵



アルファポリスきずな文庫

1 言えない本音

..... p6

2 彼のひみつ

..... p26

3 わたしのひみつ

..... p49

4 ふたりのひみつ

..... p63

5 ひみつの場所

..... p79

6 ひみつのデート

..... p99

7 ひみつのおそろい

..... p120

8 ともだち

..... p134

9 ひみつのとりにぎめ

..... p149

10 ひみつの片想い

..... p159

11 麗

..... p187

12 ほんとのうそ

..... p203

13 真実

..... p209

エピソード

..... p216



は せ がわ さ な

長谷川紗奈

美弥のクラスメイト。
女子のリーダー的存在
でかなり気が強い。湧
也のことが好き。



もり ゆー り え

森 百合絵

美弥のクラスメイトで
紗奈と仲良し。おっと
りしていてとても優し
い。



アイミ

美弥の愛猫。白くてふ
わふわ。ある日突然、
窓から逃げ出してしま
い……



にし たに ゆう や

西谷湧也

美弥のクラスメイトで
学年一のモテ王子。バ
スケ部のエースで注目
されているが、実は……

登場人物紹介

加藤美弥

中学一年生。内気で言いた
いことをはっきりと言えな
い。ある日突然、ねこみみ
が生えちゃって……!?



1 言えない本音

シャツ、シャツ、シャツ、シャツ……

えんぴつの芯がノートにこすれる音が、リズムカルに響く。

中学一年A組、教室の窓ぎわ、一番うしろの席。

梅雨の合間の時期、窓から差しこむ夏の日差しがわたしの手元のノートを明るく照らしている。

だれにもじやまされないうこの場所で、わたしは一人、一心不乱にノートに向かっていた。描いているのは、夜空に咲く花火。

えんぴつで影をつける。

暗い夜空に、鮮やかな光の輪を広げて――

絵を描くのが、好き。

夢中で描いていると、頭の中がどんどん空っぽになっていつて、いやなこともぜんぶ忘

れられるの。

「ギャハハハッ！」

突然、ななめ前の席から大きな笑い声が響いてきた。それがあまりに大きな声だったものだから、

びくびくびくっ！

絵を描くことに集中していたわたしは一気に現実に戻されて、体がビクッと跳ねてしまった。その拍子に、

カシャン！

机に置いていたペンケースに手が当たり、音をたてて落ちた。

その物音に、ななめ前の席で笑い声をあげていた女子たちが、いつせいに振り向く。

グループの輪の中心にいる紗奈が、わたしを見てあからさまに眉をひそめた。

まるで「なにしてんの？」とでも言いたげな視線。

「あ、ごめん。急に大きな声でしたから、ちよつとびくりして、落としちゃって……」
悪いことをしたわけでもないのに、つい謝ってしまう。

「だからって、ペンケース落とす？」

「大げさ」

紗奈たちが、冷たい目でわたしを見ている。

うつ……

視線が痛い。

心臓がぎゅつと締めつけられる感覚がして、わたしはうつむいたまま素早くペンケースを拾い上げた。

席に座り直して、またノートに目を戻す。

だけどさっきまでの集中力は、もう戻らない。

描きかけの花火の絵が、一気に色あせて見えた。

「急に大きな声がしたからあー」だって。わざとらしい」

「あの言い方。まるでうちらがうるさいみたいじゃないね」

紗奈たちはわたしをちらちらと振り返りながら、ひそひそと話している。

わざとわたしに聞こえるように言ってるんじゃないかと思えない。

——そんなしやべり方、してないのに。

——実際、うるさかったじゃん。

——急にあんな大きな声で笑いだしたら、そりやびつくりするよ。

心の中でぶつぶつ反論するのがやつとのわたし。

実際には、声に出して言うことはおろか、顔をあげる勇氣さえないけど。

なぜだかわからないけど、紗奈はわたしのことが好きじゃないみたい。

この中学には、西小の子と東小の子がいるんだけど、わたしは西小出身。紗奈は東小。それまで会ったこともないし、なに一つ接点がないのに、入学した時からわたしのことを目の敵にしているみたいなの。

そしてこれもなぜなのかわからないんだけど、わたしは入学以来、ずっとクラスで一人ぼっちでいる。——小学校の時は、少ないながらも、深い付き合いの友だちが何人かいたんだけどな。その子たちとはクラスが離れちゃった。

「感じ悪いよね」

「行こ」

「うん。行こ、行こ」

紗奈たちは音をたてて立ち上がると、トイレにでも行くのかな？　ぞろぞろと廊下に向かつて歩き出した。

と、その時、教室のドアが開く音がした。

入ってきたのがだれなのか、顔をあげなくてもわかる。

一瞬で、紗奈たちが前髪に手をやったり、スカートの裾を気にしたりして、色めきたつたからだ。

彼が教室に入ってくると、紗奈たちはいつもそうなるの。

「湧也あー！　おはよー！」

ほら、やつぱりね。

教室のうしろの扉から入ってきたのは、西谷湧也。

長身で、顔もよくて、バスケットボール部の注目選手。

わたしは小学校が違ったから中学に入学するまで知らなかったんだけど、東小じや有名な人だったんだって。ちっちゃい時から地元のバスケットチームに入ってたて、期待のホープとか

言われてたみたい。

地元のテレビ局の番組で密着取材をされて、その特集番組が放送されたのは、今から一か月前。ゴールデンウィークの最終日だったんだけど、連休明けの初日はすこかった。教室の前に、全校生徒が集まったんじゃないかっていうぐらいの人だからできて。放課後も、バスケット部で練習する湧也を一目見ようと体育館には大勢の生徒たちが押しかけていた。

湧也はカッコいいし、もともと人気が高かったのに、あのテレビでますます過熱した。今や、そこらのアイドル顔負けの人気ぶりなの。

紗奈たちのグループも、そう。

連休明け以来、湧也が教室に入ってくるたび、

「湧也くー！」

って、ふだんより一オクターブぐらい高い声を出して、湧也にまわりついている。

「昨日の試合、見たよ！　負けちゃったのは残念だったけど、あれは湧也以外のメンバーがヘタすぎだよな！　湧也はすつごくカッコよかった！」

「ねえねえ、今週も練習試合あるんでしょ？ 差し入れ、なにがいい？」

長身の湧也は、まとわりつく紗奈たちよりも頭一つ大きい。

湧也は無表情のまま、紗奈たちをいちべつした。

「どこかに行くんじゃないかったの？」

そう言つて、くいつ、とあごで廊下の方をしゃやくる。

湧也の冷たい物言いに、紗奈たちは戸惑つたように顔を見合せている。

「早く行けば」

湧也の声の低さから、これ以上話しかけても相手にしてもらえないつてやつと悟つたみたい。

紗奈たちは肩をすくめると、そそくさと教室を出て行つた。

わたしは一連の様子をぼんやりと眺めていたけど、紗奈たちが教室を出て行つたので、手元のノートに目を戻した。

やつと、心に平穏が戻つた気分。

再び、描きかけの花火の絵にえんぴつで影を描きこんでいたら――

キイツ。

わたしの前の席で、いすを引く音がした。

毎日繰り返してるのに、慣れない瞬間。

わたしの心臓が、ドキツと音をたてる。

「おはよ」

頭上から降ってくる、やわらかな声。

わたしはそつと息を整えると、まるでなんとも思つてないふうを装つて、ゆつくりと顔をあげた。

「おはよう」

返事をする、湧也はほんの少し口角をあげて、あくびまじりにカバンを机の横のフックに引つかけた。

――そう、湧也の席は、わたしの前なの。

湧也の特集番組が放送されて、一週間ぐらいたったところかな、席替えがあつた。

窓ぎわの一番うしろの席になれて、ラッキーつて喜んでたら。

いま今もつとも話題の人気者、西谷湧也がわたしの前の席に座ったもんだから、あの時は心臓がとまるかと思っちゃった。

だって、わたしは、湧也がテレビに出るよりも前から、湧也のこと――

「花火、好きなの？」

突然、湧也が振り返り、わたしのノートを見てたずねてきた。

「う、うん」

まさか話しかけられるとは思ってもなかったわたしは、びっくりして、目をぱちくりさせた。

「へー」

「……」

「……」

うつ。

湧也の方から話しかけてきたのに、なんでだまつてるの？ 話すことないなら、前を向



いてくれたらいいのに。緊張して、どんな顔すればいいかわかんないよ！

うう。わたし、こういう沈黙、苦手。

「花火って、一瞬の総合芸術だよ」

沈黙を埋めたくて、わたしは必死で言葉を探した。

「総合芸術？」

「うん。光と音が織りなす総合芸術」

好きなことについてだったら、話せそう。

よし、この話題でいこう。

「へえ？」

湧也がいのすの背もたれに頬杖をつくのと、わたしを見上げておもしろそうに片眉をあげた。

「花火って、お腹の底まで響くような音がドーンってなって、その直後に、一瞬で何色

にも光るじゃん？ あの色が見えた瞬間、周りがふわって明るくなつてき、みんなが『わ

あ！』って喜んで見上げてる顔が一瞬だけ見えるでしょ。あの瞬間がすごく好きなの。一

瞬で消えちゃうからこそ、心に永遠に残るんだよね」

「ははっ。そんなに好きなんだ」

湧也は苦笑した。

しまった、ちよつと語りすぎたかな。

ドン引きされちゃったかも。

……なんて後悔していたら、湧也は、信じられないことを口にした。

「そんなに好きなら、来月の花火大会、一緒に行かない？」

「え!？」

わたしの心が跳ね上がった。

と同時に思考回路がフリーズ。

えっと、ちよつと待って。

今、なんて言った？

来月の花火大会、一緒に行かない、って言ったよね!？」

一緒に、って——わたしと、湧也が？

花火大会に!？」

……そんなの、行きたいに決まってる！

でも、どうして、急にそんな話になるの!?

湧也に誘ってもらえたことがすぐには信じられなくて、わたしは何度もつばをのみこみ、気持ち落ち着かせた。

「いや、べつに、いやならいいんだけどさ」

そんなにおびえなくても、なんてつぶやきながら、湧也が顔をゆがめて、前を向こうとするから、わたしは慌てて声をあげた。

「待って！ 違うの！ わたし、花火大会、行き……」
ところが、その時。

「花火大会？ 紗奈、行くよ！」

いつのまに教室に戻っていたのか、紗奈が突進するようにこつちに来た。

「それに、美弥は花火、苦手だもんね？」

えっ。わたし、そんなの一言も言ったことないし！

花火、苦手じゃないよ！

むしろ大好きで熱く語ったばかりだよ！

勝手なこと言わないでよ。

……って言おうとしたんだけど――

「だって大きな音、苦手なんでしょ？ 花火大会なんかムリじゃん。ね？」

一緒にいる子たちに同意を求めると、みんなもしたり顔でうなずいた。

「それとも、なに？ さつき、大きい声にびつくりしただけとか言ってたけど、あれはうそで、ほんとはうちらがうるさかったって言いたいの？」

「いや、べつに、そういうわけじゃ……」

「じゃあ、花火大会もムリってことだね。ね!？」

紗奈が血走った目でわたしをにらみつけてくるから、その迫力に気圧されて、

「う、うん……」

わたしはつい、うなずいてしまった。

「ふーん」

湧也はそつけなくそう言うのと、前を向いた。

「ねえねえ、湧也ー！ 花火大会に行くなら、うちらと……」

紗奈たちが話しかけてるけど、

「行かない。オレ、花火、興味ない」

湧也は最後まで聞くことさえせず、冷たく言い放つと、それっきり、わたしや紗奈には背を向けて、窓の外を眺め始めた。

もう、花火大会のことも、わたしのことも、すっかり興味を失ってしまったようだった。

頬杖をついていて、よく見ると、うつらうつら、寝ているみたい。

はああ……

わたしは、だれにも聞こえないよう、そつとため息をつき、ノートを閉じた。

花火の絵はまだ描きかけだったけど。

これ以上は、もう、描く気になれなくて。

その日の放課後、わたしは家に帰ると、部屋でベッドに座り、愛猫のアイミをひざにのせた。

アイミのあごの下をなでると、アイミは気持ちよさそうにあごをそらし、ゴロゴロとのをならす。

「わたしはべつに、大きな音が苦手なわけじゃないの。紗奈たちの笑い声が苦手なだけなの！」

「にやつ」

「花火大会、行きたかったなあ……。湧也くんと一緒に行けたらいいのになあ……」



「にやあああ」

学校がっこうにいるときは、思おもつてることの半分はんぶんも口にできないわただけど、なぜだろう、アイミにだけは、なんでも素直すなおに話はなせるの。

「せつかく湧也ゆうやくんが誘さそってくれたのに。行いきたいなあ、花火大会はなびたいかい。湧也ゆうやくんと一緒にいっしょに」

「にやあああ」
わかつているのかいないのか、アイミはいつも、絶妙ぜつみょうなタイミングであいづちをうつてくれる。

「あーあ。あの時とき、湧也ゆうやくんにちゃんとそう言いえたらよかったな」

思い返おもすと、また胸むねの奥おくが痛いたくなる。

湧也ゆうやに誘さそわれたとき、心こころの中では、「もちろん行いきたい！」って叫さけんでいたはずなのに、紗奈さなたちの視線しせんが怖こわくて、気きづいたら「うん」なんてうそをついていた。

でも、うそなんかつかずに、ほんとの気持きもちちを口くちにしたかったよ……

「はあああ」

わたしは小さくため息いきをついて、アイミのふわふわの毛けを優しくなで続つづけた。

「にやあああ。ゴロゴロゴロ……」

心こころの中に湧わき上がる、どうしようもない後悔こうかい。

わたし、湧也ゆうやと一緒にいっしょに花火大会はなびたいかい、行いきたい。

「その一言ひとことを、どうしてあの時とき、あの場ばでちゃんと言いえなかったんだろう……」

「にやあああ」

アイミはあわれむような目めをしてわたしを見上みあげた。

まるで「どうして学校がっこうでも素直すなおになれないの」と言いつてみたい。

わたしはアイミのふわふわの背中せなかをなでながら、大きおおくため息いきをついた。

「ね。アイミも呆あきれちゃうよね」

——ぽすっ。

わたしは背中せなかからベッドに倒たおれこみ、あお向けに寝ねころんだ。

「あーあ。アイミ相手あいてだと、こんなに素直すなおに、ほんとの気持きもちち、言いえるんだけどなあ」
はあああ。

わたしは大きおおくため息いきをついて——

ふと、アイミのあいづちがないことに気がついた。

「んもう、アイミったら。無視しないでよ。それとも、アイミも、こんなわたしのこと呆れちゃったの？」

言いながら、わたしはアイミをなでようとして――

あれ？

「アイミ？」

あお向けに寝ころんでいたわたしは、むくりと体をおこした。

「アイミ!?」

返事がない。

「アイミ！」

さわつ、と冷気をふくんだ風がわたしの頬をなでる。

――え？

わたしは、風が吹いてきた方を振り返った。

「わっ！」

慌てて駆け寄ると、窓が開いている。

「うそでしょー!?」

わたしは思わず大声で叫んでしまった。

アイミ、まさか、外に出ちゃったの――!?

2 彼^{かれ}のひみつ

「アイミ！ アイミー！」
わたしはアイミの名前^{なまえ}を声^{こえ}のかぎりに叫^{さけ}びながら、家^{いえ}のまわりを手当^{てあ}たりしだいに捜^{さが}した。

近所^{きんじよ}の家^{いえ}の車^{くるま}の下^{した}。

家^{いえ}と家^{いえ}のブロック塀^{べい}の間^{あいだ}。

ぼうぼうに伸^のびた草^{くさ}のかげ。

ねこが入^{はい}れそうなすきまというすきま、かげというかげを捜^{さが}したけど、アイミの気配^{けはい}はどこにもない。

「どこに行^いっちゃったの、アイミ……」

どんどん日^ひが暮^くれて、空^{そら}が赤^{あか}みを帯^おびていくにつれて、焦^{あせ}りが増^ましてくる。

見^み上げると、今^{いま}にもしたたり落ちそうなくらい真^まつ赤^かな太陽^{たいよう}が沈^{しず}みかけている。

「出てきてよ、お願い。アイミ……！」

走り回^{はしまわ}って息^{いき}を切^きらせているわたしの息づかいと足音^{あしおと}だけが、静^{しず}かな住宅街^{じゅうたくがい}に響^{ひび}く。

「アイミ……！」

必死^{ひつし}に声^{こえ}をあげるけど、返事^{へんじ}はない。

時間^{じかん}ばかりが過^すぎていく。

真^まつ赤^かな太陽^{たいよう}は、やがて、吸^すいこまれるように地平線^{ちへいせん}の向^むこうに消^きえた。

街灯^{がいとう}の薄明^{うすあ}かりが頼^{たよ}りなく地面^{じめん}を照^てらすころには、わたしの不安^{ふあん}は胸^{むね}の奥^{おく}でぐるぐると

大^{おお}きく渦^{うず}を巻^まいていた。

どうしよう、このままアイミが見^みつからなかったら……

「ダメだ、もう一度^{いちど}ちゃんと準備^{じゅんび}して捜^{さが}さなきゃ！」

わたしはいったん家^{いえ}に戻^{もど}り、アイミがいつも遊^{あそ}んでいる音^{おと}の出^でるおもちゃと、カリカリが入^{はい}ったエサ皿^{ざら}を手^てに持^もつと、もう一度^{いちど}外^{そと}に飛^とび出^だした。

もう、日^ひはとつぷりと暮^くれていた。

でも、どんなに暗^{くら}くなっても、あきらめるわけにはいかない。

「アイミ、どこにいるの？」

わたしは泣き叫びながら、夜の街に駆け出した。

* * *

にやあああ……

風にのって、アイミの声が聞こえた気がした。

「アイミ！ アイミ！ ここにいるの？ アイミ！」

アイミの名を呼びながら、声がした方に向かって必死で捜しまわっていたら、いつのまにか川の堤防沿いまできていた。

「アイミ？ アイミ？」

返事はない。

おかしいな。

さつき、こつちの方からアイミの声が聞こえた気がしたんだけど……

気のせいだったのかな。

堤防沿いの道は人けもないし、街灯も少なく、薄暗い。

なんだか急に怖くなってきた、ビクビクしながら足早に歩いていたら――
カシャッ。

耳をかすめたシャッター音に、一瞬にして総毛立った。

……ふ、不審者!?

ただだれか助けて！

と、叫びたいのに。

悲鳴がのどの奥で凍りつき、かすれた声しか出ない。

そうこうする間にも、カシャ、カシャッとシャッター音は鳴りやまない。

声が出せないなら、せめて逃げなくちゃ。

そう思うのに、足から地面に根が生えてしまったみたいに、思い通りに動かない。
半ばパニックになっていると、

「……美弥？」

「えっ！」

ななななで不審者がわたしの名前を知っているの!?

ピキピキピキ、と心臓が音をたてて凍りついているわたしに、

「やつぱり美弥じゃん」

さわやかな笑顔を浮かべて近づいてきたのは、学年一のモテ王子、湧也だった。

首から双眼鏡をぶらさげ、手には大きなレンズのついた立派なカメラを持っている。アヤシイ!

「こんな時間ここに通るなんて珍しいな。もしかして塾かなにかの帰りとか?」

「キヤー! こつちに来ないでヘンタイ!」

わたしはがむしやらに両腕を振り回し、逃げだした。

「おい! 待って! そつちはあぶな——」

ズサツ。

「きやーっ!」

足を踏みはずし、あやうく堤防の斜面をころがり落ちるところだったわたしを、

「……つぶねー」

湧也がすんでのところで抱きとめてくれた。……は、いいのだけれど、あまりに近すぎる距離にびっくりして、

——ばっ!

と効果音が聞こえそうな勢いで、わたしは湧也から飛び下がる。

「あ、ありがと——ツイタツ!」

そのとたん、右足首に鋭い痛みが走った。

「だいじょうぶ? ひねっちゃった?」

湧也が心配そうに首をかしげて、わたしの前にしゃがむと、足首に手をのぼした。

「だだだだいじょうぶ! ……っ!」

言ったそばからまた足首に激痛が走り、顔をゆがめてしまったので、説得力はまるでない。



「ちよつと待つてて」

湧也はそばに置いてあつたリュックを持つてくると、ゴソゴソと中身を取り出して地面に並べた。

「たしか入れてあつたはず……」

リュックから出てきたのは、赤いセロファンが貼られた懐中電灯、大判のタオル、イヤホン、それに、よくわからない、黒くて四角い機械。

——アヤシイ。

テレビの『密着二十四時!』みたいな特番とかでたまに見る、警察に見つかった不審者が、観念してバッグの中身をあげ渡した時に出てくる不審者グッズみたい。

「ずいぶん本格的な……」

学校ではモテ王子なのに、まさか変質者だつたとは。

びつくりを通り越して、ガツカリだ。

「ほとんどはオジさんのお古なんだ。大きくなつたら、お金をためて自分のを買うつもり」
うれしそうに言う湧也が、理解できない。わたしにこんなものを見られたというのに、

悪びれる様子もない。

「オジさんも、変質者なの?」

思わずたずねると、

「——は?」

湧也は、リュックをあさる手を止め、キョトンとした。

「変質者? オレが?」

「えつ、違うの?」

とぼけているようには見えない。

まるで本当に心当たりがないかのように、湧也が意外そうな顔をするから、

「ごめんなさい! 多分、わたしの勘違い。——じゃ!」

それだけ言つてその場から立ち去ろうとしたんだけど……

「どうしてそういう勘違いに至つたのか説明してほしいな」

腕組みをして仁王立ちする湧也王子に不機嫌そうににらまれ、わたしは足がすくんでし

まった。

「……つまり美弥は、オレのこと、盗撮するような変質者だと思つたつてわけだ」
わたしの話を聞きおえると、湧也は静かにそう言った。

「いや、そ、それは……」

「違うの？」

「違うんです……」

白旗をあげるわたしに、湧也はふつと笑みをこぼす。

「はは。そんなへこまないで。ごめん、ごめん」

急に笑い出す。

「美弥の反応がおもしろいから、からかった。やりすぎたよな、ごめん。たしかに、見ようによっちゃあやしげなグッズに思えるかもな」

見ようによっちゃあどころか、どこからどう見てもあやしげにしか見えないそれらを、湧也は大切そうになる。

「じゃあ、それ、なんなの……？」

「星を見る道具」

へ？

ほし？

「このあたりは、星を見るのにちょうどいいんだ。高い建物もないし、街灯も少ないから、星がよく見える」

そう言つて湧也が空を仰ぐから、つられてわたしも見上げた。

「オレ、晴れてる日はたいていここで星を見てるんだ」

「へー」

最近雨が続いてたけど、今日は久しぶりに絶好の星見日和なんだつて。

「暗闇に目が慣れてくると、だんだん星が見えてくるよ。こんな街中でも、意外と見えるんだ。なにか見たい星座、ある？」

うーん、そんなこと、急に言われても思いつかないけど……

あ、そうだ。

あれ、見たい。

「流れ星。わたし、見たことないの」

答えると、呆れた顔を向けられた。

「それ、星座じゃないし。それに、こんな街中じや、流れ星を見つけるのは難しいかなあ」

「そっかあ……じゃあ、かに座とか？」

自分の星座を言ってみた。

「っていうか、それぐらいしか思いつかない。「見たい星座」というより「知っている星座」を思い浮かべるのでせいじつばいだよ。」

「かに座かあ。今の時期は見られないなあ」

かに座が夜空できれいに見えるのは、三月ごろなんだって。それに、かに座は明るい星が少くないから、見つけるのは難しいんだって。

「これだなにか星座、探してみる？」

湧也は、さつきの不審者グッズの中から星座盤と懐中電灯を取り出した。

カチツ、と湧也が音をたてて懐中電灯のスイッチを入れる。すると、ばんわりと、星座盤が赤く照らされた。

「どうして懐中電灯に赤いセロファンなんか貼ってるの？」

「せっかく目が暗闇に慣れてきたのに、まぶしいライトの明かりを見たら、また逆戻りだろう？ 赤い光は、目への刺激が少ないから、暗順応した目にも影響が少ないんだ」

「ふうん」

こむずかしいことはよくわからないので、わたしはてきとうにあいづちをうって、赤く照らされた星座盤をのぞきこんだ。

「あつ。この星座ならわかるよ。北斗七星」

星座盤に小さく描かれた、見覚えのあるひしやく型の星座を指さし、わたしは得意げに胸をそらした。

「北斗七星なら、ほら。あそこ」

うながされるまま、空を見上げると、ドドーン！ と夜空に北斗七星が横たわっていた。

「うわあ……大きい——！」

星座盤や教科書で見ると、ずつとずつと大きくて、美しい。

北斗七星って、実際に見ると、こんなに大きいんだ……！

「正確に言えば、北斗七星は星座じゃないんだけどね」

「えつ、そうなの？」

湧也によると、北斗七星は、おおぐま座の一部で、おおぐまのしっぽの部分にあたるという。

「北斗七星って、星が何個あるか知ってる？」

「そりや、七つでしょ？」

北斗「七」星って言うぐらいなんだから。

いくらわたしが理科オンチだからって、バカにするにもほどがある。
と、思いきや。

「ブー。正解は、八個でした」

「ええっ！　なんで!？」

わたしがのけぞって驚くと、湧也は肩を揺らして、楽しそうに笑った。

「水をすくう部分の方から数えて六番目の星を、よく見てごらん」

言われたとおり、順番に一、二、三……と数える。

あつた。六番目。

「美弥、目はいい？」

「うん。悪くない方だよ」

「じゃあ、六番目の星を、目をこらしてよく見てみて」

よくわからないけど、とりあえず、言われた通り目をこらして見てみる。

すると――

「あっ!」

六番目の星のすぐそばに、まるでほくろのように、小さな星が一つ、寄り添っているのが見えた。

「見えたみたいだね」

わたしの反応を見て、湧也が、ふっと息を吐く。

「六番目の星は、ミザールっていうんだ。ミザールは二等星。そのすぐそばにあるのが、アルコル。添え星っていう別名もあるんだけど、これは四等星なんだ。目がよくないと見えないことから、古代エジプトでは、アルコルが見えるかどうかで視力検査をしてたらしいよ」

「へえーっ!」

「さっき、北斗七星はおおぐま座のしつぽにあたる部分だ、って言っただろ? 水をすくう方の端っことから、順に『おおぐまのしつぽ』って文字をあてはめながら言ってみて」

「ん? 星をたどりながら、文字をあてていけばいいの?」

なんのこっちゃ、と思いながらも、わたしは水をすくう方を指で指し、一つ一つ星をたどりながら文字をあてはめていった。

「えつと——オ・オ・グ・マ・ノ・シツ・ポ……わつ、ほんとだ!! ちゃんと、しつぽの『つ』の部分がある!」

さっき教えてもらった、アルコルだっけ、あのほくろ星。あれがちょうど「つ」の役割を果たしているの。

「すごーい! おもしろーい!」

「ふはっ!」

湧也が、空気のかたまりを吐き出すように、やわらかく笑った。

「美弥の目、星よりもキラツキラ」

「だ、だつて——」

しょうがないじゃん、星を眺めるのがこんなに楽しいなんて、知らなかったんだから! 「それより、さっきから気になってただけどき。それ、なに?」

ふと、湧也が真顔になって、わたしが手に持ったままだったおもちゃとエサ皿を見て首をかしげた。

「あつ! しまった! アイミ!!」

すっかり忘れてた!

星を眺めるのに夢中で、大切なことをすっかりと忘れていたよ。

なんて薄情な飼い主なんだ、わたしは

……!

アイミ、ごめん!

「湧也くん、ごめん! えつと、星のこと、いろいろ教えてくれてありがとう! でも、



わたし、こうしてる場合じゃなかった！ 早くアイミを捜さなきゃ！」

「アイミ？」

湧也がきよとした表情でわたしを見つめる。

「うん、わたしが飼ってるねこ。窓から外に出ちゃったみたいで、いなくなったの。だからさつきから捜してるんだけど、見つからなくて……」

そう言うのと、湧也の表情がくもった。

「そっか……それは大変だな。じゃあ、一緒に捜すよ」

湧也は双眼鏡を片手に持ったまま、気軽な口調で言う。

「えっ？ でも、せっかく星を見てたんじゃ……」

「いいって。今はそれどころじゃないだろ？」

湧也はそう言うのと、身をかがめて草むらをかきわけたりして、さっそく捜し始めてくれた。

「アイミって、どんなねこ？」

「えつとね、ふだんは不愛想で、めんどくさがりで、いつも丸くなって寝てるんだけど、わたしが話しかけたらちゃんと話を聞いてくれるの。あいづちもうってくれるんだよ。そ

れでね……」

「あー……そういうことじゃなくて、見た目とか。色とか」

湧也が頭のうしろをぼりぼりとかきながら、言いにくそうに言う。

「そ、そうだよね！ 見た目ね！」

そりやそうだ。どんなねこかわからなければ捜しようがないじゃん！

わたししたら、恥ずかしい！！

「真っ白で、これぐらいの大ききで、赤い首輪をしてるの」

「真っ白で赤い首輪ね。りよーかい」

湧也はそう言うのと、茂みをかきわけていていねいに捜し出した。

「アイミ！ アイミー！」

「おーい、アイミー！」

その後しばらく、わたしたちは二人で堤防沿いをずいぶん捜したけど、アイミの気配はなかった。

人けのない通りを離れて、車通りの多い道まで来ても、アイミは見つからない。

「どうしよう……アイミ、どこにいるんだろう……」

夜はどんどん更けていく。

アスファルトを照らす車のライトをじつと見つめながら、わたしは、不安で胸がしめつけられるようだった。

「アイミー、出てこーい」

湧也がアイミの名を呼んで捜してくれているのを見ているにつれ、わたしは申し訳ない気持ちでいつぱいになった。

「ごめんね、湧也くん。ありがとう。でも、もういいよ」

「いいって、なにが？」

「アイミ。もう捜してくれなくてもだいじょうぶだよ」

「だいじょうぶなわけないだろ。アイミ、まだ見つかってないじゃん」

「でも……だつて……」

湧也は、星を見るためにここにいるのに。

それに今日は久しぶりの絶好の星見日和って言うてたじゃん。

それなのに、わたしのせいで時間をつぶさせちゃうの、悪いよ。

「オレと一緒に捜すの、迷惑？」

「そ、そんなわけない！」

迷惑だなんて思うわけない。

本音を言えば、もつと湧也と一緒にいたい。

でも、これ以上湧也の時間を奪ってしまうのは気が引けるよ。

「よく考えたら、アイミ、家に戻ってる気がするんだ。こういうこと、よくあるのうそ。」

アイミが家の外に出たこと、今まで一度もない。

「そのたびにわたしはこうやって必死で捜すんだけどね、家に帰ったら、アイミ、いつのまにかちゃっかり部屋に戻ってるんだよねー」

こんなの、うそだ。

アイミがいなくなったのは、これが初めて。

——でも、こうでも言わないと、湧也^{ゆうや}ったら、アイミが見つかるまでずっと一緒に^{いっしょ}捜し^{さが}てくれそうな勢い^{いきおい}なんだもん。

そんなの、申し訳ないでしょ？

だからわたし、うそをついたんだ。

「今^{いま}ごろ、アイミ、わたしの部屋^{へや}にいるかも！ だから今日は帰^きるね」

本当^{ほんとう}の気持ち^{きもち}とは違う言葉^{ことば}が、するすると口^{くち}からすべり出^でる。

すると――

ひよこっ。

なんだろう、頭^{あたま}のてっぺんあたりが、むずむずする。

わたしの正面^{しょうめん}に立^たっていた湧也^{ゆうや}は、驚^{おどろ}いたようにわたしを見^みつめている。
えっ。

どうしたの。

なんでそんな目^めでわたしを――わたしの頭^{あたま}の上^{うえ}を――見^みてるの？
と、その時^{とき}。

すぐそばを車^{くるま}が通^{とお}りすぎ、わたしたちの影^{かげ}がアスファルトに映^{うつ}し出^だされた。
わたしは何気^{なげ}なく、地面^{じめん}に映^{うつ}る自分^{じぶん}の影^{かげ}を見^み下^おろして、

「――えっ!？」

凍^こりついた。

わたしの影^{かげ}の頭^{あたま}の部分^{ぶぶん}から、ねこの耳^{みみ}のようなものが、びよこんと飛^とび出^だしている。
おそるおそる、頭^{あたま}の上^{うえ}に手^てをのばしてみた。

……ふわっ。

「う、うそでしょ……」

やわらかなベロアの生地^{きじ}をなでているような、この、あたたかくて心地^{こころ}よい感^{かん}触^{しよく}。
アスファルトに映^{うつ}る、小さな三角^{さんかく}形^{けい}の影^{かげ}。

……わたしの頭^{あたま}に、ねこの耳^{みみ}が生^はえてる!？」

まさか。

そんなわけないか。
ただの気のせいに違いはない。
わたしはもう一度、そつと頭に触れた。

「……!?」

気のせいじゃなかった!

わたしの頭に、なんかよくわかんないけど
耳が生えてる!

ど、どういうこと?! いったいなにがおきてるの!?

頭の中がぐるぐると混乱する。

自分の身になにがおきているのか、まったく理解できない。

「わ、わ、わたし……帰るね! じゃあね!」

情けないことに、わたしは、それだけを言うのがせいじっぱいで、まるで逃げるように
その場から走り出した。

3 わたしのひみつ

次の日は、朝からどんより曇り空。

まるでわたしの心と同じで、なんだかすつきりしない。

——昨日のあのねこ耳は、いったい何だったんだろう?

もし学校にいるときに、また突然出てきたりしたらどうしよう……
考えだしたら不安でたまらない。

教室に入ると、わたしは足早に窓ぎわのうしろの席まで歩き、そつと腰を下ろした。
グレーの薄手のパーカーのフードを目深にかぶり、心臓の鼓動が落ち着くように小さく
息を吸う。

こんな暑い日にフードをかぶっているなんておかしいに決まってるけど、昨日のように
耳が出てきたら困る。

だからわたしは今日、フードつきのパーカーを着てきた。



万が一、また耳が出てきたら、フードですぐに隠せるかなと思つて。

うちの学校、「華美なもの」じゃなければ、上着を羽織つてもいいことになつてゐるの。フードがついてゐるぐらい、べつに「華美」ではないよね？

「えっ？ なんで上着なんか着てんの？」

紗奈が、冷たい視線でこちらを見てくる。

「あ、いや……この席、エアコンが当たつて寒くて……」

うそ。

むしろ逆だ。

わたしの席、エアコンの風が届かなくて、暑いのだ。

でも、こう言うしかないじゃない。

と、その時だった。

もぞもぞもぞ。

ひえっ、きた……！

また、あの違和感！

あの耳、また出てきたのかも……！

わたしは慌ててフードをすっぽりかぶり、上から手でおさえた。

ああ、やつぱり……！

フードごしに、耳のような感触を感じる。

「うう、さむい、さむい！」

わざとらしくつぶやきながら、しつかりとフードをおさえる。

どうかバレませんように。

この耳のこと、だれにも見つかりませんように。

わたしは首をすくめ、ハラハラしながら、そつと上目づかいであたりの様子をうかがつた。

だいじようぶ。

紗奈はなんにも気づいてないみたい。

「ふーん。べつにいいけど。風邪とかうつさないでよね？」

紗奈は、少し眉をひそめたあと、興味なさそうに視線をそらすと、自分のグループの方へ戻つていった。